北京のわかれ

回教の寺出でゝ
　靜かなる朝を　訣れむ―。
軒低き門の閾は、
春楡の芽出しの　風の
はらめきの雨に　濡れゆく

♧

回教の寺なれば、
楡の木の高き　葉群に
日のあたる朝を　音なし―。
つばくらめ　門を出で行き―
―

昭和二十一年九月
「女性」第一卷第六號

忽に　霽るゝ青空

⚜

回教の寺とてや、
をみな子の出で入り固く―
　靜かなる門に―來よれる
　―いつ逢はむ耳輪の君よ。
　微笑みたまへ。わかれむ今ぞ

⚜

あなさびし。街をくだれど、
敗れたるわびしさゆゑに―、
日の本の　やまとの民に
　洋車も　すでに寄り來ず―。
　乘れと言ふ洋車も　なし

⚜

北海の午後の　さゞ波
照り返す　喇嘛の白塔―。
仰ぎつゝ　歎息づかむとす
―我が心　かくありけるか。
　―しみ〴〵とある心に　おどろく

⚜

城塁の廟の御ほとけ―
　うつくしき　をみな佛を―
　今日よりは　見ずかなりなむ―。
　―ねもごろに　禮拜める
　　後姿のをみな子も―。

獨逸には　生れざりしも

あはれ　我がめづる
　りるけの集―。

ひとの集ゆゑに　悔いなくて、
　我は　讀みけり―
この年の　いたるまで―。

この年にして、なほたのし
　りるけの集。

昭和十九年九月「三田文學」第十九卷第七號

ひとの集のよろしさ―。
悲しめど、悲しみ淡く
よろこべど、むさぼることなし。

若き日のぼへみやを　悲しめる
歌こそは、あはれなれ―。
麥の原に　木立ちまじり、
風車　青空にめぐる―：
あゝ音や―：　時過ぎてなほ　聞え、
見わたしの國原は、
　髪鬚に　人を哭かしむ。

どいつには　生れざりしも、
　我は知る。りるけの愁ひ―：
我は知る。りるけすら思ひ得ざりし

ちえこ・すらばきや人(ビト)の
とこしへなる歎きを―

地下水

ふたりの大學生
LとV―。
學校出でゝ
おとづれを聞かず　久しき。
日本橋　舊屋(フルヤ)の老鋪(シニセ)
四代經し　江戸のあきんど―

その家の　たゞ一人子と
生ひ出でしLを　思ふ―。
共產黨　世をゆすり
若人の心に　染(ソ)みて
戀の如　胸とよもす
世ざかりに　ふとぞ　かくれて
野の川の沙にしむ―
然失(シカウ)せて　行くへを知らず。

✤

V去りて　のこりたる
印象のけざやかさ―。
旋毛(ツムジ)　やゝ前にさがりて、
黑髮　そこにうづまく

ま白なる額―。

あまりに澄みきりて
ほの青く見ゆる　瞳
智慧淨く　判斷の冽けさを
思はする嫻雅なる貌―姿―：

あゝ其さへ　あとなく―
影をだに―見ずなりぬ。
をみなごの惑ひゆゑ
東京を棄てにしか―：

忘れつゝ―たゝかひの日はありて、
たゝかひの敗れたる―その日
ゆくりなく思ひ出ぬ―。

LとV―。そのかみの若き學生
還り來よ。ふたりの大學生
そのかみのLと　V―：
世は今し　おんみらの
歩けりし道を　行く。

あゝ　若く　清き心
穢れずて　この世にありや―。
恥知るおんみらは
再は　世に出でざらむ

あはれ　生きて　おんみらに
あふべき日の　あらむや―。
若きは清く　若きは烈しく

若きは　いよ〳〵悲しかりなむ

若くして　虚無の徒黨のさびしさを深く知りけむ。還らざりけり

をみなゆゑ　身をいたづらになし果てし　人を悲しむ。　老いの世にして

いさゝかの若きさかりのあやまちを　我は思へど、時過ぎにけり

飛行機

悲しめば、
空より過ぐる飛行機も
澄みつゝぞ行くー。
飛行機の光る　一翼
あな鮮けー。赤き一點
あゝ空に　よるべなく輝く

昭和二十二年十一月「人間」第二卷第十一號

飛行機 二

たゝかひの日すら　惚(ホ)れつゝ
息づまる思ひに　見しを―

白がねの翼列ねて
あゝとよみ來る　飛行機の群れ―
かくばかり　悔いの深きに

外光

昭和二十二年十一月「人間」第二卷第十一號

映畫館を出て―
せつない　明るさ。
日中(ニッチュウ)の街上に
渦まく光り―
旋(マ)ひ移る　かまいたち

外光 二

映畫のなかに鳴いた　鳥―：
目のまへの　日なたに
飛び出して來て
けろりと　ゐる―。

昭和二十二年十一月「人間」第二卷第十一號

ひもじさの　午後

なつぐさ

沙地には、すべり莧　力芝
頑に　根深めて、
わづらはしき夏　いよ〳〵長くー、

地しばり　熊桜
せんもなき装ひに
人を怒らしむー。

昭和二十一年二月「人間」第一卷第二號

山ごばう　藪がらしの花過ぎて、
その實の　げに　我は貌なるが、
目に立ちて侮はしー。

もの思はしげに　蕺草の青白みー
情濃く　萱草の婉めくー、
見かけだふしは、矮叢にもあれど、
叢の古代日本の　よろしさー。
鴨頭草の　縹深き瞳ー
たびらこの空色の　小き紋章ー。

甘んじて　雑草に對ふおのれの
ゆゑ知らぬ氣おくれを叱りて、
一擧に薙ぎ仆して　火をかけぬ

葬

しづかなる夕に　出でゝ、
ほのかなる道を　往き來す。
かそかなるもの　來寄りて、
　我が肩に　ふれつゝ過ぎぬ―。

わが耳や　何をか聞きし。
我が心知らぬ　ことばを―：

さゝやきて　ものぞ去りにし―。
　しづかなるゆふべの道に、
かな葬　一つ　穂を搖る

昭和二十一年二月「人間」第一卷第二號

陸羽西線

とんねるを　幾たび出でゝ、
淸き瀨の最上に　對す―
對岸は　道すらなくて、
靑山ぞ　ま直にさがる

✤

照り白む木の葉の　綠
平原に近きを見せて、
楡　くさぎ　ちさにまじりて
山葛ぞ　おほどれ垂る

昭和二十一年二月「人間」第一卷第二號

忽に　過ぐる向つ峰(ムカツヲ)―。
ある山は　大き赤崩崖(アカナギ)―。
ある尾根(ヲネ)は　清き植林(シヨクリン)―。
山の端の青き空より―　瀧さがるなど

ひろ〳〵と　沙をかぶりて
早苗田(サナヘダ)の空しきみどり―。
帶赤きをとめ　一人ゐ、
見のさびし―。川原田の波

ゆくりなく汽車は　とまりぬ。

屋敷田の棚田のそよぎ―
せゝらぎぞ　腦に落ち來る―。
ゆくりなき汽笛の聲に、あゝすべて　忘れゆく

同車せし旅びと　ひとり
おり行ける　山の停車場―
顏　後姿(ウシロ)　見覺えありし―
淡あはと　やがてなりゆく

橋ある水

橋づめに　家居しをれば―：
宿ながら　波も見ゆ。
目路とほく　海も見ゆ―。
　撈ぎちがふ艣の　音
　橋わたる足の　音
さ夜ふけて　あかときも　聞ゆなり。

しづかなる橋越えて―
　うち眺す焼け野の絲
　しぶき來る雨の日は―、
橋行きて還り來ぬ
幾たりの町びとのため

夜ひと夜を　まもり燈さむ
のどかなる　午砲の後―、
　ひと日　たゞ　川波のひゞきつゝ
　　ゆふべ來て―：
もの忘れ　我やせし―。
　鷗どりひとつ　かく舞ひ
富士の空晴れゐけむ―。朝明より

ゆくりなき　はためきに
明けそむる日もありて―、
　巡航船　荷足ぶね
　　はた　幾艘のもうたあぼうと
　　搔き濁す水脈の　波
うちあげぬ。橋杭に―　石垣に―

橋杭に　石垣に―：
うちかけし芥の藁
すが〳〵し　荒天の朝―。
ほど近き寮主の
夢むらし　薔薇　素馨
花の香の　ほの〳〵と匂ひ來る―

川波の音聞ゆ―
ひそかなる川波の　音―。
聽きつゝも　我は眠らむ―。

さ夜ふけと　更くる夜を
しづかにも　橋ぞとゞろく。
幸の　よき音ぞ、今し
　橋わたり來る

やまと戀

をみな子よ。我が名を知るや―。
女ごの群れに向ひて
ことゞひも爲ずて　過ぎ來し
我の齡の五十ぢの末の―
晩年に言ひ出る言の、
　くど〳〵し　老いのくり言―：
　澁面みつゝ　然勿嫌ひそ。

をみな子の住める家居は、
門べすら　清くかゞやき
飼ふ犬の聲も　はなやぐ―。

昭和二十一年八月
「四季」再刊號

女ごのよれる臆べの
二藍の臆かけ搖り
洩る詠の聲　やみて後ー
なほうたふ聲ある如く
にほひつゝ　道にひゞきぬー：
をみな子の著せる衣の
花ぐはし　櫻のたもとー
照りぐはし　春のふり袖ー
結ひ垂るゝ金の高帶ー
家出でゝ來る　そよめきは、
謠はざる歌と　とよみて
若人の心を　ゆりぬー。

をみな子は　かく好かりけりー。
女ごのよかりし世には、

男の子らの道行きぶりの
姿さへ　清くしまりて、
言ふことも　訛濁みては言はずー
しきしまの　やまとの國の
若き世代の恩寵滿りて
憑しみ深く　ありしかー。

をみな子よ。すこし裝はねー。
戰ひに負けし寂しさ
國びとの瞳さへ　萎み、
佗しさは　骨に徹れりー
あゝ骨に透る　悔い哭きー：
しかすがに　然うらぶれて
をみな子は　道行くべしやー。

若き日は　いとも貴し。
若き日に復や還らむ。
かぐはしく深き誓言（コトアゲ）　日の本の戀の盛りにー
女子と　物言ひ知らず
無用（イタヅラ）に　過ぎにしわが名
懇（ネモゴ）ろに悔いつゝ言ふを
空言（ムナゴト）と聞くこと勿れ。

をみな子よー。戀を思はね。
美しく　清く裝ひて
誇りかに　道は行くとも、
倭戀　日の本の戀　妨ぐる誰あらましやー。
戀をせば　倭の戀
美しき　日の本の戀。
戀せよ。處女子

反歌

たはれめも　心正しく歌よみて、命をはりし
いにしへ思ほゆ

をとめ子の清き盛（サカリ）時に　もの言ひし人を忘れ
ず。世のをはりまで

道のべに笑ふをとめを　憎みしがー、芥つき
たる髪の　あはれさ

しかすがに　ひとり思へば

貴賓のごとく來たりて、
ぬすびとの如く　去りにし
人を　我思ひかなしむ―。

盗人のごとくのがれし　人ゆゑに、
我はすべなし。
まことある隣びとらの　慰めぞ、
我に苦しき―。

ぬす人を　然はな憎みそ。
ひそやかに往きし　思へば、

ぬすびとのごとく逐ひしも、
我ならぬ誰ならめやも―。

盗人も　さびしかりけむ。
とりあたふ　物もなき身を―。
古ぶみの散りぼふ牀を
塵塗める寢處の疊を―
蔑みしつゝ　しかも　あはれと―：

しかすがに　ひとり思へば、
かの子らの去りにし後の、
いきのをの心　虚しさ―
わが魂は　ぬすまはれけり。

ぬすびとの如く　かくれて、

まれびとの如く　しづかに、
いづくべに　今は住むらむ。
うつつ病む人の如しも。ひとりの我は—

世代の女

日本の風土は
おんみらと　柴犬とに
赤い　短いすとつきんぐを蹶出して
あるく風姿を與へた—
だが　呪はないでおいてくれ—。
日本の神々を

昭和二十二年十一月「人間」第二卷第十一號

世代の女　二

私どもの顴骨は　やゝ高く—
たきしいどの　身につかぬ胴長—。
恥ぢて頭を搔く　表出(ヘウシユツ)—。
その劣等感のゆゑに—
日本の兄弟の　子は生まぬと
おん身らは言はうとするのか

ゆき

きさらぎの小野の雪

靜かなる夕凍(ジ)みに、
人ゆきて還らざる
道に出でゝ　もの思ふ―

きさらぎの夕じみに、
道のべの　ほの白く
　あわ雪の消えのこる
思ひこそ　はかなけれ―

昭和十九年九月「三田文學」第十九卷第七號

あわ雪の消えなくに、
ほの〳〵と　積み來たる
けはひこそ　かそかなれ―

夜に入れば、はてもなし

斷雲

かなしきに、我はつゝしむ。
思へども、言(コト)には出でじ―。
　うれふやと問ふ人あらば、
然り　たゞ少し寂しと　こたへつゝ

昭和十九年一月「むらさき」第十一卷第一號

笑みてや　居らむ。

然思ふ心の準備に、
我が心　すでに風ぎゆく
悲しくも　まさ青に澄める
大空の　愁ひのなかに、
ほの〳〵と　湧きたつ雲の
凝り充せる　白き明るさ―。

眞澄み雲　よるべもなくて、
しかもなほ　澄みて　明るし。
風ぎ〳〵て　しづけき空の
ひたすらに冴え行く色に　似たる思ひか

人拐ひ

しづかなる晝にとゞろく
午砲の音聞けば、かなしな―。
いとけなき我を　拐ひて
旅びとの行けりし道に、
晝餐する時となりつゝ
とり出でし飯の　かたまり―。
こゞりたる飯の　かたまり―。

この子らに　やる物なしと
うちすてゝ　我を措きつゝ
人拐ひ行きにし時に、

昭和二十二年十二月「四季」第五號

のどかにも　午砲鳴り出でし―
しみゝにも　腹にひゞきて
せぐりつゝ　我は哭きしか―。

冬霞　晝をたなびき
あら草は　枯れてそよげり。
一むれの旅びと過ぎて
顧みる　誰ひとりなし。

はろ〳〵となりにし　今
地にうつる　物みなのかげ―
やゝ〳〵に　濃くなりまさり
…長くなり行く

數ならで

たゝかひの果てにし後に
數ならぬものの　安けさ―。
いちじるく生けりし人の
追放はれて　悲しむ時を―
蹙ひて　ひそけき時を―。
誇へる世人の如く
冬の日に　鳥膚暖め
道に出でゝあるく

數ならぬ人とある身は
はかな歌　ほのに歌ひ出、

昭和二十二年十二月「四季」第五號

人知らぬ戀にやつれて
若き日を經つゝ來にけむ。
今はよ　野山荒廢(ホロ)ぶる
目前(マサカ)すら　のどに見なして
おどろかぬ　ほけ〳〵しさの
老い到るらし

かずならで　人に厭はれ―
はなやげる　人と行く時
ひそやかに　人のしりへに
うたひつゝ　つゞりし歌の
身にしみて　かなしかりしを
思ひ出でゝ、今もなげかふ。
我の身は　かくありけるか。
昔も　今も

繁華の幻

道のべの燒け原土に
顯(タ)つ影は、夏のまぼろし―
橡(トチ)　とねりこ　まろにえの
並み木のほど　行き還りつゝ
清かりし　銀座のをとめ―
ことゞく　死にや　ほろびし。

綿ぼこり　うづまく　電車―
藁くづのまひ立つ　ちまた―
と行けども　かく歸れども
ひた佗し。鋪道の罅裂(ヒビワレ)
今日もまた　何すとか

昭和二十二年十二月「四季」第五號

人みちて　壓しつゝうつる

ふたゝびは　銀座をも見じ。
晝霞　とほく霞みて、
伊皿子も　高輪も見ゆ。
あまりにも　のどかに晴れて
かなしきは　空の青色―。

たゝかひの過ぎし記憶は、
夢と思はむ

しをれぐさ

昭和二十一年八月「四季」再刊號。原題「すて椅子」

公園のすて椅子に―
　のこりたる　一たばの花。
　　花すみれ―。
にほひなし　ひと束の花菫―。

花むらにわけ入る蜂の
唇吻(クチサキ)觸りし思へば、
　けがらはし―。花すみれ
　ほの〳〵と　にほふすら―

おしへされ　しぼみたる
　椅子のうへの　三色すみれ―。
　　うち棄てゝ　わが來(コ)しが、―
しをれつゝ　なまめきし―花すみれ

笹子の彼方(タチ)

⚜ 宵の道

ほの暗き　甲斐の酒折―。
しづかなる森を　めぐりて、
火を立てぬ村屋　幾棟
　ほのかなり。辛夷(コブシ)の白さ―。

あはれ　たゞ片時ありて、
忘れぬる人し　思ほゆ―。
　然のみに　今も殘りて―
　髪鬚(カミモカガ)はきのふの如し。

酒折の宮より出でゝ
　ほこり立つ　宵の驛路(ウマヤヂ)―。
ほのかなる匂ひのこりて
　土の香の、我を哭かしむ

⚜ 磧

石和(イサワ)川　山より出でゝ
たぎち行く　瀨々の白浪―
　川牀の高き磧ゆ
　濁りつゝ　溢れゆく水

高原を落す　川すぢ―
　目の下に見ゆる村々―
茅葺きの續く　家庭(ヤニハ)
　白壁のそゝる　篁

日下部の里に向ひて
ひたぶるに落す　大川
　漲ふ水脈ひろければ―
激ち浪　あぐるけぶりの
すべも　すべなさ

日下部の里べに出でゝ　買ふ紙のいやしき匂
ひ　ふとぞ　さびしき

昭和二十二年二月十日「三田新聞」

三田飄眇集

知識

赤羽の橋のほどより
　歩み來て、ふとぞおどろく―

灰燼のうへに　波だつ
　圖書館の屋根の　鐵骨
いらゝぎて　空に向へる
　恐龍の背鰭なせども、

古生紀の岩に凝れる―
然　古き知識ならめや

街路樹

三田通　ま直にとほり
霽れあがる朝の　青空―

朝雨の霧　立ちのぼる
まろにえの竝み木の　梢

仰ぎつゝ過ぎし　人びと
皆行きて　還ることなし。

あらた代の潔き　知識の
爽々に過ぎし　後姿

過ぎし思ひ

みづ〳〵し　睦月の髪を
結ひ曲め　練るは　誰が子ぞ―。
おどろ〳〵　車とゞろく―聖阪
大歳のゆふべ

ほしきまゝに　然は勿出歩き―：
繪草紙屋の寵處女子よ―。

たちどまり　古川の水ゆく岸の
さびしさを　見よ。

ある一人

そのかみの友のしたしさ。
あてびとの子よりも　貴に
もの言へば、ことば匂ひし―
まれ〳〵は思ひぞ出づる：

かんにんぐ　いちはやくして
忽に忘るゝ如し―。
まれ〳〵に言ひこすふみの

往昔の文字の　つたなさ

あすたぽぽの夢

わが兄は　遠くなりつゝ
今し尙　生けるが如し―
　あはれよと　我が言はめやも―。

うらやまし。かくもかそけく
乏しくて　かくし靜けし―。

きのふかも　兄は死にけむ―

よすがなき河内の山の
古町に來つゝ　臥しゝ
　つかの間の、その安らぎの
　短きも　のどけかりけり。

短かる　のどか心を
あはれよと　我が言はめやも―。
　うらやまし　かくもかそけく―
　人心よろしき里に
　おちゐつゝ　逝ぎし　思へば―、

土師の村　餌我の古市
　川波の白き里の邊―。
犬の子は　道にころ臥し

にはとりは　道に逐はれて
けたゝましー逃げて散り行く。

とるすといの如く　死なましー
我の死は　ひそかならむと
常言ひし兄の　さびしさー。
うらぶれて來にし　あなかに
かそけくも　命をはりぬ。

看とるべき妻も　子どもゝ
竟の身の牀べに　あらずー
ま日照りて　ひた靜かなる
古町の宿の　二階に、
おのが息　ひとり守りけむー。

ー汽笛鳴る　古き驛の
壁くらき驛長官舍
荒々し　寢臺のうへに
仰ぎ寢るれふ・とるすといー：
ー然　我も命過ぎなむー

然足ふとほき　髣髴
想像る心和みに、
寂けさの　極りければー、
ゆくりなく　笑みさへ浮び
ゐみつゝも　息をひきけむ心　思ほゆ

反歌

山の町　田居と野方の道の上に、穗にほゝけ

つゝ　草の實のとぶ

あやまちを叱り　きためて、ゆるしなき兄なりしかな―。兄のかなしさ

これの世に　また逢ふこともなくなりぬ。また爭はむ日も　なかるらむ

いと長き人間の世の　おほかたを　相爭ひし兄も、死にたり

はかなしごと

昭和二十一年十月「人間」第一卷第十號

紫陽花の花の盛りは、
賑しく　悒鬱(イブセ)かりけり―。
あぢさゐの花　咲きつゞく
垣もとに出でゝなげゝば―…
わが息の白き　黄昏―。

秋の日になりなむ時に、
秋の日の光りに　照りて
この花の咲きつゝあらば、
綠葉の繁雜(コチタ)き繁り
日ざし透く白黄(シラキ)に　褪(カヘ)り―、

くねりたる枝えだ　撓(クワ)み
圓滿(マドカ)なる　碧(アヲ)の花群(ムラ)

斷童髪（フラハガミ）　端正（キラ）に揺りて
いかばかり　秋のあはれを
身に沁めて　咲き出でなむよ―。

をみな子にあらぬわが身も
をみな子の如く　なげきて―
吐く息の　しばしやすらひ
紫陽花の上に照り來る
秋の日の畫の光りを
思ひつゝ　居り

反歌

秋の日となりなむときに　かたらはむ。
戸（ド）をとぢて　かへり寢よ。をとめ

あぢさゐの花の盛りの　かくありし昔も
かなし。今のさびしさ

をとめ子は　をとめさびせよ。紫陽花の
花のいろひは、さびしけれども

筑紫の奥

久留米にかへり住む　中原武次に寄す

筑紫路の汽車を乘り來て
旅ごゝろ　すべなかりけり―。
筑後川　水の面（モ）の霞

昭和二十二年四月
「想苑」第三輯

はるゞと　卷みつゝ流れ、
照り懶く　視界になびきて
おもゝし。高良の綠ー

日の光り　晝と　眩めく
古町の　久留米を見れば、
大通り　幾筋とほりー
道の末　山に向へり。
その山に　煙立つ見ゆー：
青空に　沁み入る　けむりー：

人どほり繁き衢の
とよもしは、こゝに到らず
行き交ひのともしき街の
しづかなる家居の庭木

片枝　翳す　櫨の梢に
山の鳥來つゝ　たのしき。

我がなげく心に觸りて
言ふ人のなきが　よろしさー
ひたすらに　心なごみて
閑ある旅のひと時
われ　ひとり遊ぶ　ひと時
漲らふ　廣場の光りー

沙原も　草生も見えず
並べ干す　油からかさー
傘に　眞日照りかへり
煮え立つや　油のかをり
かさの下に　幾群さわぐ

子どもらは　山の小鳥か―。

百日紅　板塀に垂り
藍染め溝（カハ）　淺くせゝらぎ
角屋敷（カドヤシキ）　長く廻りて、
絣賣る宿のゆたけさ―。
　吹きとほる　午後のそよ風
　水うちて、軒端しづけし

店庭に　山と積みたる
絣織りの荷出しの　いそぎ
ほの暗き土間に　ほめきて
紺の香の　華（ハナ）ばな　匂ひ
旅ごゝろ　鼻にしみつゝ
　悲しみは、やるところなし

片陰の涼しき時と
　日の光り　今は傾き、
人の行き增しつゝ　來たる。
町はづれ　田舍へつゞく
　海道の辻に出づれば―、
　蒼茫と昏るゝ　田の原

夕空の茜（アカネ）ほのめく―大幟
こゝに　はためく―。
たそがるゝ衢（チマタ）の上に
　しらぬひの筑紫の奥の
　饒（ニギ）へる秋のにはかの―
　　幟はためく

反歌

たはれつゝ　あそびし俄過ぎし夜の　この夜
のほどろ　いかにさびしき

しらぬひの筑紫のにはか。この秋や　見つゝ
たのしく　思ひつゝ憂(ウ)き

掏兒

思ひつゝ　我が來し時に、
歩みよる　ちまたの男ー

昭和二十一年十月「人間」第一卷第十號

顔見れば、ふとぞ　寂しきー。
わが知らぬ人なりければ、
默(モダ)しつゝ　行き過ぎけるがー：
青びれてありし　その面(オモ)
うかび來て、目を去りがたしー

泣きなむとする　汝(ナ)が顔の
皺みたる頰のかなしさ。
なほ一目　見めと思ひて
顧みる　衢の眞晝ー
日の光り白く　澄みつゝ
はるかなる町の曲りへ
電車線路　輝き光る—。

身に近きちまたの男

ひたと　身は我によりつゝ
あわたゞし　汝がふるまひ—
おどろきに　をのゝくならし—
　わなゝけど　人を恐れず—
人の顏　沁々には見ず
　ひたすらに　人の袖ひく—

身に迫る危き　緘默
壓し來たる寒き　寂けさ—。
ゆゑ知らず　俄かに安し。
輕々し　わが身の內ゆ
何物か　去りゆくけはひ—
　ふと　そこに　衢の男
馴れ狎れし。媚びつゝぞ笑む—。

然れども　汝はあわたゞし—。
忽に　道行きびとゝ
去りゆける　けはしきそぶり—
　木隱れし山の獸と—
辻隈の赤き柱の
電柱のもとに　たゝずみ
　なほ　我を瞻れる　けはひ—

鳥擊ち帽　若人さびて—
眞新し　せるの羽織著—
足にはく下駄白じろと—
　さわやかに　身形しまれど、
すゞろはし。その目のうごき—
うち見やる我が目にあひて、
つと　そらす　まみのつべたさ—

道に押す人波のなかに
見る〳〵にまぎれ行きつゝ
いやはてに　左手の擧手(キヨシュ)ー
ほゝゑみて　入り隱れけりー。
ほゝゑみの　人をなごめし
かず〳〵の顏のなかにも
いちじるし。：ちまたの男

なつかしき人ともなしに、
たまさかは髣髴(オモカゲ)立ちて
忘られぬ　ふるきほゝゑみー。
辻に立つ　人群れのなかに
消えゆきし　齒竝みの白さー。
一瞬(アカラメ)に衢(チマタ)を走せて、

また見ざる　きんちやくきりの　白き
ほゝゑみ

反歌

すりの子も　春さびしとぞなげくらむ。三(サン)
社(ジヤ)の春の祭り　過ぎ行く

をとめ子のかんざしゆゑに、持ちさすらひ
ひそかに　すりもはかなかるべし

沙丘

わかるべき時には　なりぬ。
　さらば　手をこゝにわかたむ。
合歡（ネム）　槐低（エンジュ）く靡きて、
　しづかなる雨は　濡れ來ぬ

沙山の頂にして、
見おろせば、長濱の波
　かくばかりあへなき　別れ

昭和二十一年二月「人間」第一卷第二號

せむものと　我や思ひし

うなだれて　沙山くだり
汽笛鳴る沼邊の村へ

あわたゞし　ひとりの歩み
午後のかげ長く　闌（タ）けたり

はるかなる汀（ミギハ）の波の
夕照りの色の　さびしさ―。

人こぞる汽車に座をえて
たゞひとり　おち來る心　何とすべけむ

山上

療養所の牕に　あたる日。
牕がらすを　膚に突き刺し
ちか〳〵と　視力を損ふ。

療養所　冬にしあれば、
山肌とおなじ　枯れ色
荒壁に　雪ぞ散り來る。

兵隊ら　こゝに眠りて、
零度下の外氣を呑吐す。
潔き夜と　今しなり行く

昭和十九年九月「三田文學」第十九卷第七號

自轉車

輕井澤の裏道にて、
今日　我　人にあひたり。
　買へとて　われにすゝめしー
　錢ほしと　我にこひける
わが國のこけしに似たる
てづゝなる　人形ひとつ。

から松の幹をけづりて、
から松の幹の白きに、
　から松の皮を殘して、
　髭をなし　髪の毛つくり

昭和十三年十二月「新日本」第一卷第十二號

墨をもて　目鼻書きたり。

かくの如　わびしき物を
買へと言ひて　我により來し—
錢くれと　我に笑へる
子らの顏　つく〴〵見れば、

朱鳥(アカミドリ)　色なる　袴
翡翠(ソミドリ)の　青き上衣に、
糾(アザ)ね髮　清らに垂れて、
自轉車を押して立ちたり。

道のべに　照れる自轉車—
片手は、車におき
片手は、こけしを載せ

たゞ一つ　こけしをさし出で、
買へとぞ　我に言ふなる。

梢(ウレ)高き唐松(カラマツ)越しの
午後の日は　さやけかりけり。
處女子の清き　指(オヨビ)ゆ
掌(タナソコ)の凹みにかけて、
とほりたる手の筋　見えつ—。

〻日の本の　倭の人の—
常人(タマビト)の持(モ)たせる金を
その手より　乞ひて得まくと
思ひつゝ、我は作りぬ—。
きそひと夜　起きつゝありき—。
白銅の穴ある錢と、

松の木のこけしと貿(カ)へて、
喜びて　處女語れり。

處女子の乘れる車は、
見えがくれ　木立ちをかけり、
から松の林を拔けて
去りけれど、音のみ聞ゆ―。
自轉車の鈴

白

梢(ウレ)高き轆轤(ロクロ)木(ギ)の　花

昭和十九年九月「三田文學」第十九卷第七號

下枝(シタエ)深き常山木(クサギ)の　花
花低く這ふ　鴉瓜
卯月の村は、せつなきほど白くて、
さらになほ　白じろと　咲きつゞく―。

空木(ウツギ)の花の　赤く褪(カ)變りたるが、
稀まれに　いと安けくて、
村びとの心を　悲しがらしむ

もの忘れ

しづかなる今日の　日ねもす―。

昭和二十二年八月「手帖」第一號

飛行機も　つひに來たらず、
　　寺々の鐘　鳴り忘れ
青空は　涯霞みて、
のどかなる日光　みちたり―。

百萬遍　岡崎過ぎて、
溢れゆく疏水の水の
音深き岸　そひくだり、
花過ぎて　ひと時しづむ
京の町に、我は入り來ぬ。

いつか　われ川を越えけむ―
うつゝなく我が來る時に、
御幸町　二條のほどを
　いつか　我歩みたどれど。

橋越えて來しを　おぼえず
川東へ向へる橋は、
いと多し―出町　三條
　四條橋―五條大橋
　夷川―松原の橋
橋の數　詳細に數めど―、

妥當はじよ。二條の橋―。
耳馴れし聲ともなしに
聞き知らぬ音に響けり―。
決斷くも　二條の頭に
　渡したる橋こそ　なけれ―。

然思へど　歩みかへして

來し方と思へる道を
寺町や　河原町過ぎ
ひき返す　加茂の川ぎし—
　水の音　青柳の色

この道を　我やたどりし—
今のほど來しとも見えね—、
こゝ行かず、いづこを來めや—。
白じろと乾ける道は
さながらに　川に向へり。

橋ありき—。そこに輝き
虹の如　かゝる大橋—。
橋板の　とゞろと鳴りて
わたり來る人音　聞けば—

まこと　我　こゝを過ぎ來し—。
我が心　何か忘れし—
橋越えて　わが來しものを—。
　おどろけば　川瀬のひゞき
さわやかに　今ぞ　音に立つ—。
二條の橋　かく現實しきを　我ぞ
越えゆく

反歌

南禪寺　山門出でゝはろ〳〵に、
いんくらいんを溯る舟　見ゆ
花の後　しづかになれる京びとの

起ち居を見れば、呆(ホ)れゆくごとし

斷章

思ひおこす　さま〴〵の書(フミ)
あはれ　ほろびにし　さま〴〵の書
思へども　思ひ見がたく
さはなりし書のなかに―、
たゞ二つ　三つ　思ほゆる書(フミ)のこひしさ―。
幸薄く　纖弱(アエカ)なりし人の如
人をして　悲しみに堪へざらしむ―。

昭和二十一年十月「人間」第一卷第十號

たゞ閑(シヅ)かにして　ほのかなる　紙のにほひ

✤

日本(ニッポン)の屋並みほろびし
横濱に殘りて　かなし―。
海に向く　高き草山
うち霞む　赤き埴阪(ニザカ)

うつくしき外人墓地
遠く見て　心ぞをどる。
ことなくて　かくありけるか―。
若き日の夢のよるべ―。

合歡(ネム)の花の夢は　散り敷く
朝露の夏の記憶―：

野槌の血のこぼれたる
春早き晝の　思ひ―：

なつかしき　外人墓地
そこをだに　見ずか過ぎなむ―：
あはれよと　我が若き日に
かなしみし異域の死者の
眠りも今は　ゆたかなるべし

饗宴の記憶

沓下を　我に與へね―。

昭和二十一年十月「人間」第一卷第十號

釘長くぬき出でし沓―
赤皮の黒く濁れる
沓は、我　みがきだにせず。

深々と　ほこりあびたる
沓の腹　しかも破れて
あさましく　わが沓下の
青色ぞ　洩れて　はなやぐ―。

沓下の青色見れば、
思ひ出づることぞ　すべなき―。
戰ひのなかりし世には、
我　若く　たはれ遊びき。

人の爲　買へる貨々

ことゞく　豪華に　近代めく―
一の物は　思ふ子のため―
次々は　族娘に―。

知るほどの女よろしく
うつくしく装ひてあらば、
ひのもとの　倭のをみな
末々も　皆よろしけむ―。

鈍人の思ひほころひ
をみな子を愛での盛時に
夏深き青水無月の
大地も裂けなむ暑さに―。

海見れば　さ青の一色

山見れば　緑　各種、
天つ日の　照る空見れば―
目のかぎり　霞む深青

青こそは　天地の色
物なべて　青きより出づ―。
青を措きて　美しきもの
これの世に　またあるべしや。

若人よ　青くよそほへ―。
頭髪　瞳を　はじめに
上の衣　下のころも
袴より　沓のすゑまで
青きこそ　うつくしけめと―

然宣りて　誇りし時に、
思ふ子も　うから娘も
ひたさ青に身をとりよそひ、
嬉々然、　遊びたりしか―

欲しと言ふ子のことぐに
青み衣　頒ちあたへて
若人の青柴垣の
とりよろふ狀を想望ひし―

斯くほしきまゝに　ふるまひ
傲りつゝありしあひだに
戰ひは既にひろごり
やぶれたり。人の世の夢―

たゞ夢と　あとなくなりて―、
をとめ子は　兵器造り―
をのこらは　いくさの場に―
若き者　皆家出でぬ。

夢ならば　覺めむ時あらめ―。
夢ならぬ　たはれ遊びに
官びと　我をにくみて
家　財　奪りて　放逐ひぬ―。

戰ひの果てにし後に
かくしつゝ　四方に漂浪れて
乞食の如く　さまよふ―。
夢ならぬ　青の幻術師―。

青色の天地見れば
青山は　黄に衰へ
濁りつゝ漂蕩ふ　青海ー。
青空の常遠の絲ぞ　なほ
我を誘惑く

反歌

あなくるし。四月五月の野の鳥も、青き
山より出でゝ　鳴くなり

昭和二十二年十月「月刊讀賣」

夏幻想

畫

にくみ難しと言ふ　聲すー。
土に沁み入る日の　光りー
眞夏の畫の　せつなさの
やる方もなき靜けさよー。
默あることのすべなさに、
地に蹲ひて　息づけばー、
にくみ難しと　うめく　聲

夕

たそがれの水より　出でゝ
ほの〳〵と遠き　白鳥（ハクテウ）ー

水無月のしら雪の如
ひたと浮くー。湖（ウミ）のおもて。
目な離（カ）れそ。やがて消えなむー
言ふ聲の　纖細（アエカ）なりしかー、
あはれ　その聲消えて
ふたゝび聞かむ　日もなき

新盆

死におくれたる人の語るを聞くも、今は、かへりてめでたくて

盂蘭盆會（ウラボンエ）　近づきにけりー。
しづかなる空に　むかひて
なげきせむ我と　思（モ）ひきやー
盂蘭盆會近づく時に、
わが思ふことぞ　はかなきー。

わが子は　つひに還らずー
わが子を　いつとか待たむー。
わが子の果てにし　島に、
しづかなる月日經行きて、
そのあとも今は　消ゆらむー。

昭和二十一年十月「人間」第一卷第十號

日曝しにさらす　毛ごろも
ありし日の汝が服見れば、
　染め深き青鈍色も
かくならむ兆の喪の色―。
　かくなりて　何か思はむ。

盂蘭盆の棚をつくりて
供へたる野山の物の
あな寂し　色ぞ花やぐ―。
芋　瓜の牛馬つくり
　我ひとり見つゝぞ　笑ふ。
あまり　拙劣に―

反歌

都べの盆の月夜の　身に沁みて苛き
暑さを　ことしさへ在り

はるかなる島べの土の、目にしみて我
はおもほゆ。盆の月夜に

冬くさ

黄檗の門見えそめて
靜かなる朝を　しぐれぬ―。

昭和二十一年二月「人間」第一卷第二號

篁も、冬くさむらと
かそかなる風に　そよめく

⚜

黄檗の門出でゝ
いづこまで歩まむ　我ぞ。
冬くさの霜とけて、
芒の細りて　咲くを
叢の虹と　見む

⚜

冬くさに　あたる夕光
のどかなる午後ぞ　さびしき―。
冬くさの　あまり明るく―
祕はぬ思ひを持てば、

かくさはぬことの　さびしさ

⚜

青波と　青空のあひだ
磯高き　冬草むらに、
我ひとり　行きぞ苦しむ―。
外个濱　能代の道は
その後や　二十年行かず

⚜

わが母は　病ひ養ふ。
隣室も、をんなやまうど。
冬芝のかげろひ溫き
ひねもすに睦みかはして、
夜はひとり　母ぞ苦しむ―。

隣室の女やまうど
あまりにも　うま人なれば

天　地

町びとの家に生れて、
町びとの慣ひに育ち、
まち人と　あそびくらして
　年高く　町を離れず。

　そこゆゑに　心むなしくー、
山川の廣きを見れば、

ひたすらに　心さびしー。
道の邊の茨(ウバラ)の　白きー。
田の畔(クロ)の五加木(ムコギ)の　黄なるー、
　山遠く入りて見し
　赤々と　深き大崩(オホナギ)崖ー、

大海を漕ぎ出て見れば、
まどかなり。青の一つ輪ー。
　たゞむなしー。ことばも出でず
あめつちに向ひて　ひとり　大き歎息(ナゲキ)す

餘目

餘目の驛に　おりたち、
　よすがなき心を　はなつ―。
ひたすらに　道はかわきて
　ものげなく　さびしき驛邑―

✤

餘目の驛邑を出でゝ、
ひたすらに　灌溝とほれり。
　鳥海の南おもてに
　わが外に　立つ影ぞ　なき

✤

昭和二十一年二月「人間」第一卷第二號

ありきつゝ　ふとぞ　疑ふ。
水涸れてつゞく　灌溝も―
　萱草の　咲く幾群も―
　餘目の鍛冶屋の　音も―

✤

春の日の殘雪と見れば、
白じろと　崩落げる山肌―。
　ゆくりなく　心ぞいたむ。
　青水無月の鳥海の山―…

✤

餘目の町の竝み木の
合歡の花　散り過ぎよかし―。
　沙ぼこり白く蒙る

くれなゐは　あまり色濃き

⚜

餘目の町のわびしさ。
餘目の子らが遊びの
女男(メヲ)さぶるすさみ　はかなし。
皆還れ―。あまりすさまじ

⚜

いつまでも見えて　響(ヒビカ)ふ
汽車は今　向きをかへたり―。
最上川　ひと日霞みて
餘目の驛ぞ　暮れゆく―

海の幻

しづかなる朝明に起きて
床の上に　大き　吐息(ナゲキ)す―。
われ竟に　かくの如きか
我つひに　空しく老いて
かくながら　命終へなむ―

庭の面になびかふ霧の
ほの〳〵と　たゞよふ上に
紫陽花の　碧き　花群(ハナムラ)
澄み〳〵て　深海の色―：
見つゝ　わが心ぞ疼(イタ)む

昭和二十三年四月
「新世間」創刊號

みむなみの琉球の海の
沖縄の遠き空より
かへり來し　洋の記憶―。
　大洋の波に　穿けたる
　航空路の氣孔の青さ

人知らで　洋中に
渦潮ぞ　鳴りめぐる―。
　旋り澄む青一處
飛行機は　そこにおちいる…。
　瞬間に見し　あぢさゐ―

たゝかひのなかりし時の
沖縄の海のまぼろし―。
　戰ひにやぶれし國の

さすらひの　老いのこの身に
　とり返すものともあらぬ
　―青きまぼろし

智慧

時々に　我はうたがふ―。
　すりの兒を　我や　やしなふ

かをりよき煙草の　けぶり
ゆくりなく　身をつゝみ來て
　彌ゆく　わが袂

昭和二十二年八月「詩學」第一卷第一號。原題「知識」

ふと覺ゆ―。重く垂るゝを。

にほふ靄　わが目に立ちて
家居(ヲ)る我が机のうへに
　ほとと　音　輕くおち來る―
　　いづくより來しものならむ

いづくより來しものならむ―
　わが心　急(トミ)につべたく
　もの言ひの　鋭くなりて
　ことわりを　苛(カラ)く言ひ判(ワ)く。

賢くて　ひとりあらむは、
神すらも　堪へずと言へり。
　ひたすらに　さかしきことの、

　ひたぶるに　さびしかりけり―。

いとからし。とくをさめ去ね。
　いとからし。すりの兒の賂(マヒ)

昭和二十二年五月六日「朝日新聞」

新憲法

われらの生けることば以(モ)て綴り、
われらの命を捺印(オシテ)し、
　いちじるき　清き紀元を　畫日(ヒカ)くー。
うちとよむ　時代の心

句々に充ち　章段にほとばしる―
　我が憲法　生きざらめやも。

たゝかひは終りたり。
この日ごろ　ひたぶるに
靜かなる國土(クニ)の上に
思ほえず　あがる歡び
　憲法は　さだまりぬ。
　憲法の　めでたさよ。

かぐはしき五月(サツキ)來て
國朗ら　人ほがら
日高見の　明らかに
あざやけき命輝き、
　ひらけ行く國の心―

あゝわれら　こゝに生れむ

憲法の生るゝ日に、
　憲法の立つ日に、
さきはひに　われありて、
この生ける　現目(マサメ)以(モ)て
喜びの日にあへる
　國びとの心を　見む

憲法は　さだまりぬ。
憲法ぞ　いつくしき。
あゝ　心ゆく　如何なる語(コトバ)を以(モ)て―
この新しき　國の紀元に、
　與(アタ)り照る國びとの心を
　後(ノチ)の代に―とこしへに傳へなむ

あきくさ

秋草の花を　見に出よ―。
あきくさの花の　盛りは、
　しづかなる心たもちて
　ひと日だに　滿(タ)りてくらさむ

秋草の花の　ひさしさ―。
夏深き山の　八月(ハツキ)に
薙ぎ棄てし　ひよどりじやうご―
　霜じみて咲く　日となりぬ。
　山を降らむ

ひと時の盛りを　すぎて

叢は青きにかへる―。
松蟲草(マツムシサウ)　青く蕾みて
やゝ〳〵に　色立つ見れば。
紫は　とゝのほりたり―。

山の秋　いよゝ深くて
もの音は　山に絶えたり―。
里に沁む秋の　しづけさ―。
　家群(イヘムラ)に出で入る道は
　草むらに　深くこもれり―。

秋の日の　かげろふ　晝を
ありきつゝ　まかげをかざす―。
山添ひの道の　藪原
立ち白む朮(ウケラ)の光り

秋深し。山を降らむ―。
秋ふかし。薄　かりやす
穂に出でゝそよぐを　聽けば―、

日おもてに散りぼひ　とざす
別莊に　音たえにけり。
山はたゞ　日ねもす光り
山はたゞ　鳥も來鳴かず
風の音　いよゝ澄み行く

照り白む道を　來たりて、
踏み返す道の叢―。

たゝかひに行きしわが子の

還るまで　我があるべしや―。
叢を出でゝ咲きたる
ひとむらの「葉見ず花見ず」
草の名の、はかなしごとゝ
思へども、思ひ過ぎめや―。
親と　子と　死にせぬ間に、
あはむ日ありや

青年

そのかみの　父の座敷は
わがいきの　やすらひどころ―。

牘の外に立てる　ひともと―：
年を經し　立ち處かはらぬ
梧桐の　いとも　よろしさ―。

竹の如　直立つ幹の
竹の如　滑らにまろく
竹よりも白け　粉ばみて
なつかしく乾ける　祕色―
ほの〳〵し――。青磁のはだへ―

匂はしき祕色の　はだへ―。
かぐはしき若代の　賦色―
幻影に顯ち來るものは、
青年のかゞやく　五躰
立ちそゝり　光る現し身―。

はるかなる遠世語りと
我が思ひ　今は舊りぬれ―。
愛しよと　我をいだきて
哭きしをぞ　沁みてし　感ゆ。
その當時の潔き　青年―

青年は　深くなげゝば―
ほの白き生肌　澄みて
泣きぬべく　憂ひをさそふ
―輝やかに透ける　薄肌
すが〳〵し　淨き頸すぢ―

薄肌の　和しき光り
流らふる肩の　さやけさ―

梧桐の枝の岐れの
うち霞む梢を　見れば、
　青年の聳る　後姿ー

若ければー照肌ほめき
隈々し　深山の雪の
水無月に冴え立つ光りー
　暢やかに　清き兩脛
　然強く土を　蹈みしかー。

わが見るは、坪のひとつ木
　瑞々し　はだへ凋まず
　光りつゝけぶる　桐の木ー
まのあたり　祕色の肌を
呆れつゝも　わが瞻る時にー

梧桐の幹を　流れて
　濡れ〳〵と　傳ひ來るものー
　梢より垂り來る　雫
　　わが前に　ふとぞ　こぼるゝー
ー琅玕の汗と　思はむ

幻影は　夢より淡くー
夏の日の午後に消え行く。
雪といはゞ　あまりに淨く
　然さびしー。祕色の記憶ー
人知れず思ふは　苦し。
　老いの世にして

半日

今の間は　靜かにいませ―。
そむきしが　還り來ずとも、
　み心は　いつか和ぎなむ。

たゞ暫し　歸り來たりて
家ごとの變ふ見れば、
　安からぬ日々の　思ほゆ―。

いとさびし　かゝる家居に
獨り棲む君を殘して、
　また　我はいくさに向ふ―。

昭和十九年九月「三田文學」第十九卷第七號

洋中の島の守りに、
つれ〴〵と　日々を送りて
　ことあらば、玉と散る身ぞ―。

辛く得しひと日の　いとま―
　さは言へど、君をし見れば、
　時の間に　やつれ給へり。

背きしが　來む日ありとも、
行きて　我かへらざるべし。
　然覺りて　ほゝ笑む君か―。

行く方も告げぬ旅ゆゑ、
草の戸に―　君を見殘し
　いさみつゝ出で立つ　下の心　知れりや

反歌

ひたすらに堪へてもいません。のこる世に　我を思はむ君と　たのむに

父の島　母の島

たらちねの　母が島
ちゝのみの　父の島
みむなみのわたのみ中に

昭和十九年九月「三田文學」第十九卷第七號

父母の島ぞ　立つ見ゆ。
戀しけくわが見る島の
父の島　父やと言はゞ、
海阪(ウナザカ)の彼方(ヲチ)ゆ　こたへよ。
母が島　母とぞ賴む。
我が子らを　眞實(サネ)――：

母を讃ふ

靜かなる母なりしかなー。

身動(シヾロ)きの、音にも立たず—
咲き滿てる大き白花—
　ゆたかに　匂ふが如し

日の本の　やまとの母は
のどかなる代々(ヨ)に　出で來て、
言ふことの　清く　正しき
　其聲ぞ　耳に澄み來る

道に立ち　人呼ぶ處女
零落(ウラブ)れて　斯くし流離(ツスラ)ふ。
いつの代か　妻になりなむ。
よき母と　いつかなりなむ
髪鬚(オモカガ)に顯(タ)ち來るものは

そのかみの倭の母
あな戀し。我が生みの母

贖罪

序歌

すさのを我　こゝに生れて
はじめて　人とうまれて—
ひとり子と　生(オ)ひ成(ナ)りにけり。
　ちゝのみの　父のひとり子—
　ひとりのみあるが、すべなさ

昭和二十二年五月「八雲」第一卷第四號

天地は　いまだ物なし―
山川も　たゞに默して
　草も木も　鳥けだものも
　生ひ出でぬはじめの時に、
　人とあることの　苦しさ―。

すさのをに　父はいませど、
母なしにあるが　すべなき―。
母なしに　我を産し出でし
　わが父ぞ、慨かりける。
　いと憎き　父の老男よ。

母産さば、斯く産すべしや―
胎なしに　生ひ出でし我
胞なしに　やどりし我

天地の私生と
胎裂かで　現れ出でしはや―。

父の子の　片生り　我は、
不具なる命を享けて、
　我が見る　世のこと〳〵
　天の下　四方の物ども
　まがりつゝ　傾き立てり。

男なる父の　沁物　凝りて
成り出でし　純男と
　あゝ滿れる面わもなしや―
　わが脚は　眞直に蹈まず、
　舟舵如　横に折れたり―

父の身に居ること　百世ー。
生れいでゝ、白髪生ひたり。
白髪なす髯も　垂れたり。
劍刃と　齒は生ひ竝び、
深々し　頰のうへの皺。

わがあぐる産聲を聞け。
老い涸れて　四方にとゞろくー。
わが息に觸りぬるものはー
青山は枯れて　白みぬ。
大海はあせて　波なし。

我が力　物をほろぼすー
憤悲し　我が活き力
わが父や　我を遁ろへ、

我や　わが父に憎まえ、
追放はれぬ。海のたゞ中

わたつみの最中に立ちて
我は見ぬ。わが周圍をー
我は見ぬ。露膚われをー
我は見ぬ。わが現し身をー
吠えおらぶ我が　足搔きをー

更に見ぬ。わが生みの子の
八千つゞき　八よろづ續き
穢れゆく血しほの　沈澱ー。
あはれ其を　あはれ其奴らを
豫め　亡しおかむー。
物皆を　滅亡の力　我に出で來よ

すさのを

わたつみのけだものは、
人の如　脚に立ち
　ひたすらに　もの欲りて
　人の如　泣きおらぶ。

我が耳や　わが聲聞かず
　たゞに聞く　けだものゝ聲ー
さびしさは　わたのけだもの
　もの欲りて泣き哮ぶらしー。

かき濁る泥海に

昭和二十二年十一月「人間」第二卷第十一號

潛きつゝ　我が來れば、
　鼻も目も　泥凝りて
　芥つくわが髪やー。

わがかひな　沙土にうもれ
八束脛　海　蹈みとほし
　立ちながら　軟泥とぢたりー。
行きがたし。海原の道ー

堅氷なす　立ちて苦しみ
　泣けばたゞ　潮騷の音ー。
額にさす光りは見れど、
　わが目らや　つひに盲ひなむ
高天の　我が姉よー。

今助けに來よ。わがいろ姉ー。
わが咽喉は　火と燃えたり
たゞ欲りす。乳汁のしづく

わが御姉　我を助けて
かき出でよ。汝が胸乳
あはれはれ　死ぬばかり
いと戀し。汝が生肌

天つ戀

—すさのを斷章

昭和二十二年五月「群像」第二卷第五號

何にかく　心さわだつー。
戀びとを見れば　たのしなー。
然はあれど　焦躁さつのり
面火照りー怒るに似たり。
　唇かわき　人に恥ぢつゝ
　　而もなほ　畏るゝごとし。

かゝはりなく　その言ふことの
委曲に聽けばよろしきー。
ものがたる處女の背向
おのづから　眶濡れつゝ

　靜かなる思ひの湧くはー、
　さわやけき　眞清水の如
あはれ　我　人をほふりぬー

むしろ　我　戀を戮しぬ―。
戀びとは憎しといへど、
わが酬い　君をころしき。
　散る花の冴えざえしづむ
　ほの白き　處女のむくろ―

青雲の向臥すきはみ
　高天が原とほく霧れつゝ
　今ぞ竟ふる―戀の贖ひ。
天つ戀　雲と消えぬれ―
我が裔の千五百子孫に
　現界の身を　ゆすり來る
　國つ戀あれ

愉悅

わが心　日に幾たびか　拷問に苦しみ、
わが心　日に幾たびか　號泣す―。

いにしへの俘囚の如
我が仰ぐは、たゞ方尺の牖―。

時に　青空の片端の　隱見するありて、
愉悅と　鄕愁とを　極度ならしむ―。

わが心　童さびして、かの人を思ひき―。
わが心　母戀ふる如　かの乳房を思ひき―。

昭和二十一年五月「展望」第一卷第五號

悦べば、物を毀り　散亂し、剰へ　彼人を打ちしかー。
わが戀は　人の　惱怒り　呼ぶに似つ。

我つひに　この囚屋にくだりて、
虔ましき思ひに充てる　時を經たりー。

こゝにして　初めて知りぬー。
惻々として　心を潰す戀の…

悔恨に似て　深く　さびしく、
悲しさの　たゞちに　たぬしきをー。

この時ぞ、大空の蒼き瞳　我が上に來たりて、
わが心を　靜かにすー。

のどかにして　輝ける滿地の花ー。
限りなき幻想を　腦の空に開きてー、

今しは　心穩しき俘囚の、
再　鞭の下に呻吟ふこと　なくなりしよりー

蹋りて寢たるかひな　其が上に置ける額
蒼白く　膨脹み瘦せて、

目は　膚は　時々の印象を追慕し、
柔らなる渾身を　形づくらむとすー。

わが心　日に幾たびか　獨り　笑み
わが心　日に幾たびか　空虚笑ひすー

夢の剽盗

すさのをの　い寢しあひだに、
まれびとは　剽盗となりて
さきはひのありのこと〳〵
　ぬすまひて、逃げ行きしはや

夢さめて　こゝにおどろき—
もろ手以て捉らむとすれば、
　枯木なす　臂曲げがたし。
土蹈みて　追はむとするに
　脚力失せて　仆れぬ。
聲あげて、よばむとすれど、

舌尖　ものだに言はず

骨しゝむら　奪りても行かめ、
我がことば　ぬすまふべしや—。
　わが魂の欲りするまにま
わが思ふ心　言ひ出る
　わがことば　ぬすまふべしや—。
おれ　我が子大國主
おれ　醜のぬすびと奴

阪もとの草に臥い伏し
わがなげく　八尺のなげき
ひら阪の土さへとよみ
そこに到りきや

神　やぶれたまふ

神こゝに　敗れたまひぬ―。
すさのをも　おほくにぬしも
青垣の内つ御庭の
　宮出でゝ　さすらひたまふ―。

くそ　嘔吐　ゆまり流れて
蛆　蠅の、集り　群起つ
直土に―人は臥い伏し
青人草　すべて色なし―。

村も　野も　山も　一色―

ひたすらに青みわたれど
たゞ虚し。青の一色
海　空もおなじ　青いろ―。

稗草の穂に出るものは
穂に出でぬ間を　爬み枯し
白き乳の垂るものとては、
若茱すら　子らに　喰ふ。

たゝかひの果てにし時に、
神集ふ　荒神たち
　鹿島神　香取神
　ことゞひの　ひと言もなし―。
たけみなかた　諏訪の御神

おほものぬし　三輪の大神
　言稀に宣すみ語の、
言寂し―。なげきぞ　深き

既く　我たゝかひ敗れ
負け勝ちの本質は知りたり―。
　人間の闘ひ打つ　いくさ
　天上に　神しろしめす

人のする嚴の咒詛を
神　天に　いかゞ拒まむ―。
　人の請ふ　咒詛のまゝに、
　神業は　さながら振ふ―
現し世の心を致し

人の世の力を盡し
　信深くたゝかふものを
　神　たゞに　空に見たまふ―。

諏訪　鹿島　大三輪　香取
　ありとある　荒神たち
　國びとの　かたらふまにま
ひき〳〵に力を出し

たゝかひの心鋭强化り
たけり來る信の力を
いくさびとの信の力を
　さながらに表したまふ―。

―神いくさ　かくこそありけれ。

神いくさ　かくありければ、
人いくさ　さながらふるひ
負け勝ちの道ぞ　さだまる―。

あはれ　嚴の咒詛の力
あはれ　信深き心ぞ
神いくさ　たけびにたけび
人いくさ　あたをつくさむ

神いくさ　かく力なく
人いくさ　然も抗力なく
過ぎにけるあとを　思へば
やまとびと　神を失ふ―
日高見の國びとゆゑに、

おのづから　神は守ると
奇蹟を憑む　空しさ。
信なくて何の奇蹟―。

かくのみにありけるものを
人言にかたらはれつゝ、
神ごゝろ深く　きずつき
神裝ひすべて　穢れぬ―。

神力　示す　時もなく
神いくさ　完全に　敗れて
面目なしや―　齋垣のうちに
神と　我還ふべしや―。

神語り　かくもかなしく
神別れ　別れし後に、
　懇切に思ひしことの
　夢の如　今し思ほゆ―。

まこと―我神を忘れつ―。
　國びとぞ　神を失ふ―。
然いたむ神の心を
いつの日か　なごめまをさむ。

今の間は　御殿に還り、
神いくさ　やぶれしことを
忘れつゝ　たひらぎたまへ―。
　國びと我が　心いたみも　今は
　いこへむ

反歌

神こゝに　敗れたまひぬ。しづかなる青垣
山も　よるところなき

國びとの思ひし神は、大空を行く飛行機と
　おほく違はず

信薄き人に向ひて　恥ぢずゐむ。敗れても
　神はなほ　まつるべき

きずつけずあれ

わが爲は　墓もつくらじ―。
然れども　亡き後なれば、
すべもなし。ひとのまに〳〵―

かそかに　たゞ　ひそかにあれ

生ける時さびしかりければ、
若し　然あらば、
よき一族の　遠びとの葬り處近く―。

そのほどの誓しは、

昭和二十一年二月「人間」第一卷第二號

村びとも知りて　見過し、
やがて其も　風吹く日々に
沙山の沙もてかくし
あともなく　なりなむさまに―。

かくしこそ―
わが心　しづかにあらむ―。

わが心　きずつけずあれ

近代悲傷集　追ひ書き

「北京のわかれ」「地下水」「飛行機」「飛行機」三「外光」「外光」三「世代の女」「世代の女」三「數ならで」「繁華の幻」「三田飄眇集」「はかなしごと」「筑紫の奥」「掏兒」「もの忘れ」「斷章」「饗宴の記憶」「夏幻想」「夕」「新盆」「海の幻」「智慧」「新憲法」「母を讃ふ」「贖罪」「すさのを」「天つ戀」「愉悅」「夢の剽盗」「神やぶれたまふ」

右の三十篇は、初板「古代感愛集」と同時に、別に一書とするつもりで纒めてあつた「近代悲傷集」の稿本の一部の殘つたものである。勿論この中には、若干その外加つた新しい作品を含んでゐる。その餘の二十五章は、もとの「感愛集」に收めたものを、今度「悲傷集」の方へとり戻した訣である。あの當時、「感愛集」の中、五十頁ほどに渉る部分を、急に削りのける氣になつたことがあつた。其を補ふためには、其に當る分量を、「悲傷集」の方から、とり入れるほかはなかつた。それで思ひきつて、そんな爲方で「感愛集」だけを出すことにし

たのである。

別にどうと言ふこともなかつたのだが、時勢が今とは違つてゐて、そのまゝでは、出版書店に迷惑をかけよう、と言ふ懸念もないではなかつた。さて其もとあつた五十餘頁の作品は、「感愛集」からとり棄てた訣だが、今度の角川君のところの再板に、悉く復活させた訣ではない。之を機會に、あまり出來のわるいのなどは、思ひきつてしまふ方がよいと思うたからである。

殊に斷簡十篇―初板感愛集所收―及び其と事情を同じくしてゐる未發表の作品は、そのまゝ埋沒することにした。別に惜しいと言ふほど、苦勞をした記憶のない作物だからである。もの に憑かれたやうな心持ちから出來たものだからと言つて、さう輕く見るのは、殊に詩などの場合、考へ直さねばならぬことも屢ある。が、人に賴まれて作つたやうな氣持ちの、重くもたれかゝつてゐる作品などは、後味がいつまでも快くないから、除きたくなつたのである。其なら一層、こんな物も省けばよいにと、人には思はれるものもまじつて居ないではなからうが、自分には自分で、棄てられない理由や執著などもあつて、殘した氣持ちは察してほしい。詩や歌の場合、私など、さう〳〵他人を對象としてばかりは、作つて來なかつたからである。

さう言ふ風に整理して、數の多過ぎる初板「古代感愛集」から、大躰出來の新しい順で、「近代悲傷集」の方へ送つた。其でまづ、この集の元の形に戻つた訣である。

私の詩における履歴は、極めて淺いのだが、其だけに、私自身の中に、急激な移り替りがあつて、自然この二つの詩集の性質を、かつきりと分けてゐるやうである。

亡くなつた白秋さんなど、「あなたは、自分の詩を、長歌々々と謂つてゐるが、ちつとも普通の詩と變らないぢやないか」と言つたことがある。併し前集後集を竝べて見ると、兩者の違ひは、目につき過ぎるほど、現れてゐるやうである。どうしても、感愛集のてまは長歌調にあり、悲傷集はさう言ふ所が、まづなくなつて來てゐる、と言へるやうである。

詩人ほど、變化その事に、意義を認めようとするものは少いであらう。私なども、短歌の方では、以前から一作毎に變化すべきことを說いて來たのである。だが詩には、も少し謹愼の氣持ちを持つて來たものである。文藝の徒にとつて、現在は、勿論一番重大だが、十年・二十年・半世紀・一世紀位の推移の上に、文藝をおいて考へて見ることも、忘れてならぬと思ふ。

新劇なども、たまには見るが、赤い毛や、青い瞳まで模倣するのが正しいか、日本人の地のまゝでとほして行くのが、劇の本來なのか、疑問のまゝで、さま〴〵な形を見過してゐる。

詩では、新劇などよりももつと、英斷をとほして行けば行くことが出來る。民族の限界として、越えることが出來るか、出來ないかゞ問題の言語の個性を、いちはやく飛び拔けようとする人々を見る。私などは、わりに早く其方に氣のついてゐた方だと思ふが、この進みについて行けるのは、たゞ勇氣だけの問題ではないと考へる。發想・表現法を飛躍するよりは、世界思想を民族心の中に齎す方が、もつと可能性が多いやうである。

そこで思ふ。私などは最力ない古典派作者だが、一方亦、ろまんちくな感懷詩人である。だがもう、其にも留つて居られない。現實の生活が、私の腹から、胸から、私をつきあげるほどに、迫つて來てゐる。何よりも、私の詩が、時々深い現前のおくびを洩しはじめたのを、どうする訣にもゆかない。

「第三詩」とでも命けようか。「古代感愛集」にも、「近代悲傷集」にも、緣のないやうに見える作品群が、戰爭末期から、既に相應なかさに堆積して來て、別にある。人には何でもないことだが、私にとつては、前後兩集とは、あまり變り過ぎて來たのである。そのまゝたゞ考へてゐる。これは、私のやうな作者にとつて、眞に感慨無量である。心が志のまゝにならぬのである。

思想が私を引かなければならぬのに、どうも生活が力を持ち過ぎてゐる。自分ながらたのも

しくないと思ふ。

まあかう言ふ、舊作の整理などをしてゐる中に、どうしても、又新しい創作の動機に觸れなくてはならぬことになるかも知れぬ。それが私を更に好しい方角にふり向ける力となつて來るかも知れぬ。そんな期待がどこかにあつて、何か知らまた、たのしく思ひ出した昨今である。

追ひ書きは、「悲傷集」にとゞめたいのだが、「月しろの旗」に關聯したことだけは、言ふ義理あひを感じる。初板本には、三つに分割して載せた詩だが、今度は一つに纏めることにした。其うへ、沖縄の知識に乏しいのが、通常である今日から見れば、も少し心切にするのがよいと思うて、各部分を、誰かゞ表白してゐる詞と見なして、發語者を註しておいた。併し必しもその人の言ふ所でなく、作者の考へや、又人物の心の隈に屬する所もある。其を皆出場人物にあてたのは、歌劇などゝは、凡關聯のない作品だが、筋を辿りながら、さう言ふ風にでも考へて貰へば、訣るだらうと思うたので、そんな方法をとつたまでゞある。

現代襤褸集

現代襤褸集　目次

雲……三四三
春汗……三四四
日本の戀……三四五
歎きの繪……三四七
暗渠の前……三五一
瞬瞰……三六〇
息……三六一
最上君の幻影……三六三
平凡……三七〇
平凡　二……三七二

童話……三七三
童話　二……三七七
童話　三……三八一
水中の友……三八三
關の扉……三八五
花道で……三八六
三十代の選手……三八七
堀君……三九二
堀君　二……三九三
堀君　三……三九四
堀君　四……三九五
山居……三九六
ごろつき仙人……三九七
鎭魂頌……四〇二

田無の道……四〇四
まぼろし源氏……四〇七
生滅……四一七
古き藝文……四二九
八事の鐘……四三一
水底……四三五
輝く窓……四三八
堀君の計……四四五
弔辭……四四七
正法眼藏……四四九
嘘　一……四四九
嘘　二……四五一
洗濯　一……四五四
嘘　三……四五五

洗濯　二……四五七
嘘　四……四六一
失題……四六七
秋の家……四七〇
枯れ枝……四七一
蜑が家……四七二
夕藤……四七三
朧夜……四七四
田うゑ歌……四七五
茶のかをり……四七六

雲

わらんぢを　蹈み脱いで
こらへられぬ　怒り湧く―。
　迸る腹立ちは、
八月の山脈に
　―突入する
　わが激情

昭和二十二年十一月「人間」第二巻第十一號

春汗

春さきは　しがぁなんぞ　銜へて
かなしみを　ほき出すやうに
　森の中から　やつて來る男ー。
　その泥沓を　脱いで　まああがれ

娘の肌に　汗ばむ喪服ー
　そいつは　暗過ぎる。
出窓は　がらすの
くら〳〵する陽炎だー

昭和二十三年四月「文藝春秋」第二十六卷第四號

日本の戀

日本の亡びる日が　來ても、
娘たちは　花櫛なんかさして
　歌つてゐるだらう　と言ふー
　豫想に、いら〳〵して居た
　　我われのまへにー

につぽんの衰へる日は　來て、
日本のむすめらは　無感覺になり
　一様に　寡婦(ゴケ)の喪服の
　薄汚れたやうな物から
　短い脚を出して　すた〳〵來るー

昭和二十三年三月十五日「毎日新聞」

すれ違ひざまに　君を避(ヨ)け損つて
横仆しに投げ出された
自轉車の青年ーその顏ー
　どつか　お痛みになつてー
　まあ　大變ー
　これ位の勞(イタハ)りを豫期した顏の　失望

青年の神經は　蝙蝠のやうにうら枯れ
青年の容貌は　穿山甲の如く這ふ
　生き難い島の日を　生き戻り
青年の血液は、唯一疋のおほ蜥蜴だー。
悲しむにも　怒りを以て表情するー。
そんな青年がー瞬間

憤ることに途惑(マヨ)つて、
忘れ果てた　青い愁ひを浮べるー
日本の戀は　ほろびるのだ。
戀の亡びた日本なぞ　どつかへ行了(イツチマ)へ

歎きの繪

弟は
いまだに　足駄なんかはいて
日本のどぶ板の　うへを
　重くるしい足音で　あるいて來るー

昭和二十三年六月
「詩學」第三卷第五號

弟の戀びと　と言ふのに
會つてやつたが―、
美しいにはうつくしい　子だつたが、
何か斯う　空目などつかつて、
人の言ふことに　氣を入れて居なかつたりして―

弟は　このごろ
どこか　若い女性めいて
―すぱ〳〵と　おぴゆうむらしい煙を吐き
空間に　きやしやな抒情詩風の文句を綴る

兄さん　僕　音癡だつてね―
音癡さんのお相手は　しないことよ
―て　言はれたの―

弟は　額髪を揃へてきり　垂つた毛の間に漆のやうな黒瞳を　濡らして居た。

すぷりとの　猫のやうに
まるまつちく　頬を輝してゐるので―、
その憂ひは　まことに　柔やかで―、
やつこさん　やつてるな　と悲しみに安んじることが出來た。

安んぜよ。弟よ―
おまへの女の子の　すべてのそぶりが
然して―おまへの身に　どん〳〵しみついて行く

娘が完全に　おまへから立ち去つた時―、
おまへの身を以て
あの娘の一擧一動を―

一瞬のしなやかな身じろぎまでも—
描き出すやうに　なるだらう。

『おまへの心に把握した　匂ふやうな姿態—
あゝ　覆る　珊瑚を刻んだ白塔—、
おまへの感覺を活す　東洋畫風の性靈だ

おまへの感覺を活す東洋畫の性靈が
おまへの把握した匂ふやうな姿態を
美しく描き出して　我々を悲しませるだらう』

足駄を履んでは　來なくなつたが—、
東洋畫に謂ふ—性靈が、おまへの感受を活して、
おまへの心に把握した　匂ふやうな姿態を
ます〳〵麗しく寫し出して、

我われを悲しませることだらう

暗渠の前

丘陵と平野との　入りくんだ田園都市のあひだを
流れくねつて來た　野川が、市街に入つて、
やがて　大きな停車場下（シタ）の暗渠に　流れこまうとする寸前—
涸れきつた冬の流れが、深い塵芥と　泥の堆積に堰かれて
—細ぼそと—だが、武藏野の流れを思はせるやうに　澄んでせゝら
ぐ處に—彼は居た。

つめたく　凍えて彼は居た。

昭和二十三年九月
「表現」第一卷第四號

この言ひ方は　少し正確を缺いてゐる。
彼の緣者の一人も、自分の目で　彼の姿を見たのではない―
流れの上に　假り橋が架つて居て、
燃料倉庫へ　通ふことになつてゐる―
その倉庫へ　貨物を　はこんでゐた驛員の幾たりかが
見たと言ふ話を　復聽きに聞いた　不確かな噂だが―
彼は居た。投げ出されて―。

せなかを上にして、大の字形に投げ出されて居た―。
美しいずぼんをはき、清潔なわいしやつを著けた　上衣のない死體
を―
醉つぱらひか　行路病者の　自業自得の死を憎むやうに
―その日終日……それから　まう一日……恰も引きとりてのないこ
とを　豫期したやうに、あつさり
火葬場の竈穴の殘り火に投げこんだ―。

その翌日　晝過ぎ―。遙かな山の村から彼の兄が　馳せつけた時、
既に一年も　保管してゐた物をくれる樣に―
砂つぽい牀　埃つぽい机……　其よりももつと紛亂した
戸棚の雜物の上に　はふり上げてあつた角な箱を
あんな死狀をした　死者に對する―
胸くそ惡さの意趣ばらしでもするやうに―
がたくたと　音立てゝとり卸し、ぬつと　彼の兄の胸に　つきつ
けた。

兄はたゞ　せつない喜びを感じてゐた。
―でも、よかつた。彼のからだ―だ。
ひよつとすると、喪失しきりに見失ふことになるかも知れぬ
と虞れつゞけて來た　彼のからだ―だ。

なによーぼやぐ〜してるんだ。
判こ押すんだよ。こゝとこゝ―。
謂れなく叱られてゐる様な感じが―
叱られて　ぢつとこらへてゐる感じが―
弟に對して　してゐる善行のやうに…
兄は　こらへとほした。
ほとんど無感覺な男になつて―。

兄の前には　大きながらす窓
横日を受けて　沁みるやうな冬の反射
その外の通りに―人が行き、自轉車が行き
今　電車が　行つた　三十分隔きの―。
これ以上　汚れることの出來ぬほど
蜘蛛の巣の　はりついた窓がらす。
その前に　立ちはだかつてゐるらしい

小がらで　色が白く　頰のほとつてゐる
耳の　ぺたつとした―此だけの　會社員風の顏　動かない　鋭い瞳
瞬間　兄の目は、此だけを視覺した。

萬年筆で書きこんだ　住所氏名の欄に、
某縣　某郡　某町　縣立中學校々長某
證券いんきがにじんで、すぐ　乾いた。
内ぽけつとから取り出した　印筴
二十年前　家督と共に
父の手から　受けとつた水晶の印
兄弟愛の立ち會ひ人に
父が出てくれた　實感を以て―
嚴肅に　捺印する―。

何某の下に　押しあてた　水晶の感覺が、

何か清冽な水を覺え
次いで―澄みきつた一連の珠數―。
なごやかな珠數の瞳(ヒトミ)が　相集つて、水晶の印材に還つた時―、
　どんな野獸の胸にも　沁みこんでゆける博い―
はれ〴〵とした心の泉に　立つてゐる自分を見た。

どんな動物の神經とも　をれあつてゆける　のんびりした―
外貌(ミテクレ)のよいことばを
　自由にする　自分を見た。
恭しくさし出す　爪の先まで充血した兄の手から
ひつたくる様に　とりあげた相手の目を
兄はやつぱり　うつとりした氣分で　眺めてゐた。

ふん　とでも言ひさうな　空氣の微動
　でも幾分か　禮讓ある人間のことばで―

じつさい　困つたもんですよ。
行路病者の始末には　しよつちゆう
　泣かされてるんでね―。

何千圓を容れた　がまぐち
がまぐちををさめた　上著
肩の凝るほど　著重(キモ)りのする外套―
　親身の感情は、それ等の盗難の殘忍性に向けて、
　火のやうな憤りを　凝結させてゐた―。

しかしなぜ　この警察事務官のやうに、
思ひを專ら　亡き骸の上に　置くことをしないのか―。
生命なきものゝ故を以て、假借すること毫末もなく
薄汚く　秩序を潰滅させた　のたれ死に對する怒りを
　かくの如く　直言することが出來れば

弟の死と　弟の死をめぐる親身の感情を
もつと正義化することが　出來たであらう。
尠くとも　死んだ弟の身替りに―
　豚函なんかに叩きこまれる怖れに
　びく〳〵することなどは、なかつたらう。

ともかく　おれには出來ない。
やつぱり　山奥の識者として
　過去の知識に生き、人情に溺れて暮すのが、宿命なのであらう。

すつかり夕かげりになつた　窓に向ふ位置を離れて、
何か　感謝したいやうな　心もちで、
深く頭をさげて　玄關へ―。
　ほつと　息―。
　弟よ。もうこれで　おれと還つてくれ。

おまへを　置くのに　こゝはあまりひど過ぎた―。

教養の高いおまへが　教養のない薪ざつぽう見たいに　燒かれて、
田舍識者と謂はれたおれが　すつかり
とまぐれて、教養をふつとばし
なかんづく　愚な半日を　今日は過した。
だが愚に近かつたのは、おれたちだけぢやないぜ―。
いくさ呆けに　ぼけた日本人には、
ひとりの智者だつて　出て來ないのだよ。
わかつたかい　おまへ―

じれつたさに　箱をゆすると―、
箱の中で、骨(コツ)のかたよる音がした。
　ほい　弟は居たのだ―。
　骨(ホトケ)が戻つたゞけでも

戰死者よりも　弟の方に
幸福が殘つてゐた　と謂へる―。
なあ　さうぢやないか　と箱をゆすると、
こと〳〵と言ふ　箱の中の　音

瞻　瞰

悲しむ女　窓により
見おろしてゐる街の　うへ
はすかひに來る　自動車
つぎ〴〵に衝突し
深ぶか　けぶる夕明り

昭和二十四年「若木文學」春季號

ほの〴〵と　路上に移るもの
しみ〴〵と　目もて追ふ

はんかちの　白き憂ひ―。
いつまでも　昏れ殘る衢へ
出でゆかむ。無帽にて

息

石原に　野槽(シドミ)咲き
川原より　霧のぼる―。
風まぜに散る　穗花

來つゝ　我　かなしめば、
　むら〳〵と　髪に吹く

裏戸出て　見るものは、
ひたすらに曇る　空
　さびしさの久しきに　我がなげく時
　つと　よりぬ。君が頬ー。
　息ざしの、清きつめたさ

目ふたげば、光りの輪
　くるめきて　額(ヌカ)にまふー。
眶(マナブタ)に　虹の色　けざやかに
　あゝ　わが目　盲ひむとす
あゝ　わが目　盲ひよかし

最上君の幻影

冬ー。寒さのどん底を思ひ知れと言ふ風に、
山の村々からは　炭を送つて來なかつた。
すとらいきずきの人たちは、其はたらき場所で、一かけらの褐炭す
ら掘り出さうとしない。

國民が總凍え死にを覺悟した　寒(カン)のどんづまりにー、
ひよつくりと　彼は消えて行つた。
ーまことに　消えるやうに

溝川の中にのめりこんで、
ぬく〳〵と著ぶくれて出たらくだの上著もー、

昭和二十四年一月「短歌研究」第六卷第一號

其から　ちよつきも脱いで、
若い二十代の銀座をとこが
ちよつと　電話をかけに出たと言つた形(ナリ)で—
夏の日なかにでも　見るやうな姿で—
溝川の中に　うつ臥せになつて　死んでゐた。

この知らせを受けとつた時—、
友人の端くれの私にまで
響きわたつた衝動は、
ものを考へることを　厭にした—。

どうして　彼が死んだ—のだ。いや死んだのではない。
あの姿を見たものは、誰ひとり平凡な死を想像することが　出來る
はずはない。

だが—、警察は、これを簡單に處理して、
一日おいて翌々日　極めて平穏に、
骨と灰とに　燒き分けた。

す早く燒かれてしまつて、
まるで、證據湮滅に歸した骨甕(コツ)を抱いた兄は、
某氏の私設探偵事務所を訪れた。

だめですなあ。これは。
あきらめるんですなあ。
かう言つて、同情をため息で表現した。

そんな　こぼれ情(ナサケ)にあづかる爲の、多額な鑑定料を拂つて、
悲痛な氣持ちで、兄は山の村へ還つた。

何もかも忘れきつたやうに、白け果てた骨甕を抱いて―。
その當時、思ひ浮べたとも思へない印象が―、
今頃實感を持つて、目に浮んで來た。
何處(ドッ)か斯(カ)う　密室めいた部屋から　かつぎ出される彼―
機敏に動くからだゞけで、顔はぼやけて見えぬ犯人
ふたゝび―自然死のやうに　溝川の上に置かれた屍骸の彼
私の描く幻影の　幾分ふまじめな氣のするのが恥しい。
其ほど、彼の死は　人の心をいたましめた。
私は　幻の續きを語ることが出來る。―
身分不相應に大きな磔(リック)ばしらを背負はされて、
白目(シロメ)を天に向けてゐる―…

せめて、此幻想に―詩人だつた彼をいつまでも　浮べておかう。
さて―。誠實な若者の多かつた日本―。若いが爲に、誠實であつて、
その爲に、悲しむべき喜劇に、仆れた　數知らぬ若者たち―。
陰口ばかりきいて、ちつとも協力しないで、日本の葬列を　ながし
目に見送つた中年男
國家も―それから其上に、尊むべきものすべて　ふいにしてしまつ
て、
いまだに　悔いることを知らぬ―かつたいばら　老骨
それらが寄つてたかつて演じた　喜劇の幾種目―。
若い命を以て演じた喜劇の―幾種目―。
この　身にしみる感情が、―後代すべての人間を泣かしめるだらう。

私の「最上君」は、既に壯年に蹈み入つてゐた。
併し彼の心は淨く、身は常に代謝するもの〻如く、
いさ〻かも穢れを留めなかつた。
此だけの瑞々しい生活の上に　詩人であつた彼―。

最上君が若者であり、その死が若者たちの死と、おなじ印象を與へることを　私は不思議とは思はない。
若者たちの死に次いで、國は瓦壞した。
國亡びて　民は皆、剽盜となり　掏兒となり、賣笑と變じた。
最上君は、國人沈淪の悲しみに先立つて、磔(ハタモノ)に上つた。
柱を背負ふに當つて、恐らく彼も　基督の如く　涙を垂れたであらう。

彼の如く淨き命を虐げることは、基督を殺すに當る。
彼の死は澄んで、基督の瞳の如く、彼の言説は、救世の響きを　國

人の胸に傳へたであらうから―。

私の心は、おなじ思ひに　若者たちの姿を追ふ―。
翼を持つた　いたいけな磔(ハタモノ)を負つて、若者たちは、次々に海に墮ちる―。
多くの若者の死ぬる姿を　ぢつと〳〵瞻(マモ)つてゐる私の目を過ぎて
彼の羽ばたきも　消えて行く……

―だが、しかし
溝川の底に流れる　冬の水
水のやうなせ〻らぎを掩うて
溝板(ミゾイタ)のやうに張りついて、靜かになつた彼の姿を
もつと　しみ〴〵考へたい。
悲しみ過ぎる私の心を　それが　ほつと明るくしてくれる―

尊過ぎて　あまり悲しいものに　君を考へて、私は哭けてならなかつた。
神の如く死ぬることのうるはしさが、君をおちつかせないのではないか　と思ふ。

平凡

一望の平野
平坦な綠の　廣い勾配
　個性のない　青一色の農原
眞青になつた枝ばかりを　つつ立てた桑の畝

昭和二十四年二月「短歌研究」
原題「平原」第六卷第二號。

轆轤木の叢
むつとして蹲みこんだ　藍色の靜まり―
個性のない物の　成長力のすばらしさ―。
雲が何度か　伸しあがつて來て、
　灰ばんだ地平に　のめづりこんでしまふ―。

一ぴきの燕も　生けては還すまいと
つつ立つてゐる　水力電氣塔

風景は平凡の上に煮え沸つて
而も　殘虐にだまりこくつて
物を煎り殺さうとする　午後の頂上

平凡 二

炎天の冷酷な沈默―。
心細くなり出した　おべつかつかひの微風が―、
　ほんの一時（イットキ）　そよいで見た。
白い齒が　ごきげんとりに　ちろめいた―ぽぷらの　若葉
すつこんで居れ。おまへたちのちやらつぽこに
氣をゆるす　夏の風景なものか

昭和二十四年一月「短歌往來」第三卷第一號

童話

午砲（ドン）の　大きな音で
耳を　つきぬかれたやうになつて、
子どもらは、晝飯から　戻つて來た。
兄が言つた。
　おまいたち　大きくなつたら、
　何になりたい。
　よう　お前は何になりたい。
順ぐりに問ひを　廻した。
二番目の兄　三番目の兄
それから、近所の子
出入りの者の　子どもたちにも
ある者は　石川五右衞門だと言つて、
　あほたれと罵られ、

昭和二十四年一月「自由詩人」

又ある者は　おまはりになると答へて
　その著實な望みを　ばかにされた。
蜘蛛になる　と言つた小さい兒も
お女郎になりたいと願つた女の子も居つた。
わたしに　順番が廻つて來た時、
　わたしは　日本一の金持ち
　鴻池善右衛門になる　と答へた。

へん　はな垂れ房主が―。
糟ゐばり爲らい。
　言ひながら　兄は　一返に
　不機嫌な顏になつた。

居あはせた子どもたちは、
兄の憤りに　導かれて、

　自分らが傷けられたやうな　表情をした。
不道德な　仲間はづれが、
協和の和みを　蹈みこはしでもしたやうに。

さう言ふ小さい社會人の
非難の顏色に　突き刺されて
幼い感情は　背骨の下に縮みこんだ。

人の壓迫を　はね返す衝動が
　こんな時に　突發しようとは、
　知らぬ私であつた。―幼いわたくしに來た
　怒りの啓示―

―坊は　白鳥になるんだ―。
思ひがけなく　大きな聲が出て、

私自身　びつくりした。

へえ　と驚いた顔の兄が、
瞬間に、輕蔑の表情を立て直して、
金持ちは　やめか。
乞食にならずに　白鳥になるか―。

だが　おめえなざ―、黑ちやぼだ。
跛ちやぼの　目爛れ矮鷄の
そばかす矮鷄やあい―
腹癒せの凱歌を
ほき出すやうに　言つた
この呪ひのやうな―童話が
一生つき纏うて來た　私―

白鳥の羽ばたきの空耳―
あゝ白鳥―

童話　二

彼らの死んだ後―
生き殘るのが、私だつたとしたら―
私は　何をしようと　するのだらう。

彼らの死骸の　重りあがつた懷から
―用意した　その死金を
掏りとらうとするだらうか―

昭和二十四年七月
「詩學」第四卷第五號

―青ざめた彼等の額に
鼻唄をなげつけて
胸のすいた思ひで　通り過ぎるだらうか―

幾ら何でも　こんな豫想は、
私自身を　つまらない兇徒に
しあげ過ぎる―。

…だが、ならうことなら、
最期の枕の上に横へた
彼等の頭蓋を　ひらいて―、

その中に　つめこんだ
―こんなことを考へ―

考へてゐて、默つたまゝで持つて行つた
―彼等の思考

その腦みそだけに印象した
映像に立ち入つて　見ようとするだらう―

私の戀を　うけ容れる目つきをしながら
同時に、他人の愛を、思ひ浮べてゐた女は―
そのうつり氣を　揉み消しておくがよい

私を　殺戮けてやらう
―さう言ふ想念に　囚はれた男は―
早速　その誘惑を　ふりもぎつて逃げろ。

まさか　私だつて

死んでしまつた思考にまで
かたきうちは　しようとしないだらうが―。
私は　たゞ恐れる―。
彼等のうちの　唯ひとり
彼の頭腦の中に　成熟しきつた詩を見つけた時―、
それを　追ひ剝ぎのやうにかつぱらひ、
それを　故買人(ケイヅカヒ)みたいに　受け賣りして、
私は詩人だ　と言ふ顏つきで―
一廉(イツカド)の拐兒(カタリ)になりすまして
しまひさうな氣が　するので…

童話　三

緬羊の背にのつて
小さなをばさんが　やつて來る―。
私のわきを通りすがりに
つぶつてゐた　目をあいた―。
まあ　きれいな目

かはいらしいをばさん―
聲が出ようとしたとたん
緬羊が　とこ〳〵と走り出した。

緬羊の毛が　全身に輝き
　見る間に遠のいて行くー。

もう目のとゞかない　遠くへ紛れこんで
　唯一かたまりの靄が　漂うてゐるー。

をばさん　をばさん
　あなたは　どなただいー

昭和二十四年二月
「表現」第二卷第二號

水中の友

いつまでも　ものを言はなくなつた友人
もつとも　若かつたひとり
たゞの一度も　話をしたことのない
二三行の手紙も　彼に書いたことのない私ー
併し　私の友情を　しづかに　享けとつてゐてくれた彼を　感じる。

友人の死んだ時
私は、嵐の聲を聞いた

若い世間は、手をあげて迎へるやうに
はなやかに　その死を讃へたー。
老成した世間は、もみくしやになつた語で、
日本の澁面を表情したー。

一等高さの教養を持つた人だけがー
何とない貌で

たゞ　その姿を　消ゆるにまかせるだらう!。

さう言ふ　この國の爲來(シキタ)りを
彼は信じて　安らかになつて行つたに違ひない。

若い友人は、若いがゆゑの
夢のやうな業蹟を　殘して死んだ。
こればかりは、
若くて過ぎた人なるが故の美しさだ　と言ふ思ひが、
年のいつた私どもの胸に　沁む!。

何げない貌で　死んで行つたが!
ほんたうに　遠く靜かになつた人
もういつまでも　ものなんか言はうとしないでゐたまへ!
ゆつたりとした心が出て來たら!、

私の眶(マブタ)を溫める　ほのかな光りをよこしてくれたまへ

關の扉

柴垣を折つぺしよつて　焚いてしまふ大雪!
櫻は夜(ヨル)も咲いて、花びらだつて　散らさうとしない。

花の精が出て　泣く前(サキ)の世(ヨ)に
人は血を以て　戀の詩を書き
さうして
　靜かになる

昭和二十四年二月
「表現」第二卷第二號

花道で

花道で―
すつぽんが　ことりとあいた音―。
空虚のまゝの…長い間―。
奈落の夜霧にのつて耀(セ)りあがり
どこまでも　のぼつて行つてしまつた　立敵(タテガタキ)

昭和二十四年二月
「表現」第二卷第二號

三十代の選手

若き時―能く　野球を驅(ツカ)使つて
世の人に記憶せられし―
既(ハヤ)く　せんせいしよんは、

渦汐に乘る如く
安んじがたきを悟りて、
當時―この國に唯一(ユイイツ)なりし
職業野球團のぴつちやあの地位を投げて

新興大都市の　大工場の
青年訓練所の指導者の格にて
足(タラ)ひつゝ去りにしが―、

その後や　音絶えて

昭和二十四年二月
「表現」第二卷第二號